



Title	富山県の方言について
Author(s)	真田, 信治
Citation	阪大日本語研究. 1994, 6, p. 131-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10679
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

富山県の方言について

On the Toyama Dialect

真 田 信 治

SANADA Shinji

キーワード：方言接触，混交，接触方言，東京語化

1. ここでは、筆者のフィールドノートをもとに、富山県の方言の特徴と動向とを述べてみたいと思う。

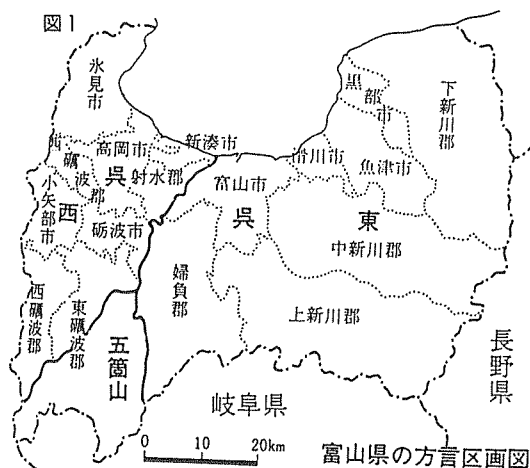
近畿文化圏の周縁部に位置する富山県には、袋小路の地形のもとに、中央で生まれたさまざまなことばが次々に伝播，進出してきた。しかし，そのことばの勢力も，後ろにひかえる連峰に阻まれ，それ以上向こうへは進めなかったために，ここがいわば吹き溜まりのようになったのである。この地がしばしば古語の博物館とも称されるのはそのような理由による。

柳田国男の「蝸牛考」（『人類学雑誌』42巻4-7号 1927）は，「蝸牛」の名称について，富山県における分布の説明から書き起こされていることに留意されたい。

2. 図1に富山県全体の方言区画図を示した。

県内は，大略，呉東と呉西，そして五箇山という形で三つに区分される。呉東，呉西というのは呉羽山にちなんだ呼び名である。この山を含む呉羽丘陵が，富山平野を二分する形になっている。五箇山は，東礪波郡の平，上平，利賀の三村の総称であるが，加賀藩政時代には外界から遮断されていた山間の地で，それぞれのジャンルにおいて，古いもの，中世的なものを残存させている。

本土方言全体から見ると、富山県方言は西部方言の領域に入るわけであるが、細かく見ると、呉東の方にはかなり東部方言的な要素も存在する。



精神文化の面について、下野（1983）によれば、富山県人は進取の気性に富むが、一方では地味で堅実を好み、しかも団結心に富むといった風があるという。したがって、持っているものを容易に捨てることをせずよく保存する方向へと導いていく。そして、地域的な統一性を求めていく。

このような新しいものを先取りしようとする積極性と、ある意味での保守性とが相俟って、ことばの面においても「新しいもの」と「古いもの」とが重層的に混在するという形での多様性が形成されたわけである。

3. ことばの混交の例としてよく取り上げられるのが、理由を表す接続助詞である。

たとえば「雨が降っているから、行くのはやめろ」という文脈での「から」である。関東はカラであるが、関西、たとえば京都では「雨が降っているサカイ、行くのんやめよし」のようになる。ただし、大阪では、サカイ

が現代の若者の感覚からはすでに遠くなって、カラに置き換わりつつある。なお、名古屋では「雨が降っとるデ、行くのはやめよ」のようにデであり、出雲、松江では「雨が降っちょうケン、行くのはやめやっしゃい」のようにケンである。

サカイ、カラ、デ、ケンは、それぞれの地域方言での指標ともなるものであるが、富山市の近在では、「サカライニ」とか「サカライデ」という形が使われている。

雨が降っとるサカライニ、行かれんなま

雨が降っとるサカライデ、行かれんなま

これは、サカイとカラ、あるいはサカイとカラとデが混交した形で、西部的要素、東部的要素、中部的要素をすべて含んでいるわけである。

また、呉西の一部には、「雨が降っとるケニ」、「雨が降っとるケデ」のようなケニ、ケデの形も散見するが、これは出雲などでのケンに系統的につながるものではないかと思われる。なお、五箇山では「雨が降っとるデ」のようにデの形がサカイよりも古いものとして使われていた。これは岐阜の方につながるものであろう。

このような状況を見ると、まさにこれは混じり合いの様相で、これが富山県方言の一つの特徴なのである。

4. 語法に関して総合すると、指摘されているように、全体としては西部方言的ということができるが、細かく見るとやはり一筋縄ではいかない点も多い。

断定の助動詞に例を取ると、ダとジャ・ヤの境界線は新潟との県境にほぼ沿って走っているが、富山市の周辺部ではダもかなり一般的に使われている（「行くがダ」）。これは東から借用したものではなく、本来のデア（中世末期の中央文献に見える）から直接変化した形であろうと筆者は考えている。現在もこのダの領域に隣接する中新川郡の一帯にはデアの存在が認められるからである。デアからはジャも同様に派生した。五箇山ではジャが普通であったが、最近では平野部でのヤを受け入れつつある。そして

その受け入れは女性の方が先行しており、ジャに対してヤを“ていねい”な形式と認識する傾向が強い。

動詞の打消形については、「読まん」「起きん」「寝ん」「来ん」「せん」で明らかに西部系である。ただし、サ変の場合には、五箇山の upper 平村周辺では一段化した「しん」の形が進展していることが認められる。

過去形に関しては、「落とイた」「刺イた」のようなサ行イ音便が存在する。また、五箇山に限って「ノード（飲んだ）」「トード（飛んだ）」のようなウ音便が残存している。

仮定形については、「ヨミャ」「オキリャ」「ネリャ」「クリャ」「スリャ」（上平村では「シリャ」）の形式である。

命令形は複雑である。筆者は＜軽い命令形＞と＜強い命令形＞とに分けているのであるが、＜軽い命令形＞というのは意志形と一致する。たとえば「ヨモ（読もう）」というのはふつう意志形であるが、富山ではこれを使って「はよ（早く）ヨモ」と相手に命令できるわけである。「こっちにコ（来う）」というのも「コイ（来い）」に対する婉曲的な命令となるのである。なお、＜強い命令形＞の場合、上一段、下一段、サ変には地域差があり、上一段の「起きる」を例に取れば、五箇山では「オキヨ」、呉西では「オキー」、呉東では「オキロ」の形が代表的である。

形容詞「～なる」の形は、「赤い」を例に取れば、呉東でアカナル、呉西でアコーナル、五箇山でアコナルが一般的で、いずれも音便の形を示していて西部的である。

尊敬の助動詞レル・ラレルの運用には独特のものがある。この形式は当地では柔らかな表現形式で、特に女性が子供に対して使うことが多く、命令形を持っている（「行かれ」「来ラレ」）。ちなみに、この助動詞の命令形については、岡山の備前あたりにも見られる（「行かレー」「来ラレー」の形で）。なお、五箇山ではレル・ラレル敬語がもともと存在しなかったが、最近は多用されるようになってきている。五箇山ではヤル敬語が代表的なものであった（「行キヤル」「見ヤル」）。また、高岡市付近から能登にかけての一部にはテヤ敬語も存在している（「行ッテヤ・行ッチャー」

「見テヤ・見チャー」）。

助詞では何と言っても、準体助詞としてのガの存在が特徴的である。たとえば、「読むのがむづかしい」「雨でも行くのか」などの文脈における上の句を体言化する「の」はガとなるのが一般的である。

読むガがむづかしい

雨でも行くガか

ちなみに、このようなガの用法は、離れて四国の高知方言にも存在する。

なお、ダイクシスにかかわることであるが、標準語の「行く」で表現される部分に「来る」が対応する場合がある。

明日あんだのとこへクルちゃ＜自分の行動を相手に向かって＞

これは出雲や九州の方言につながる用法であり、また、英語と同じ体系でもある。一方、標準語の「やる」で表現される部分に「くれる」が対応する場合がある。五箇山では、目下や同輩に向かっては、

この菓子お前にクレルわ

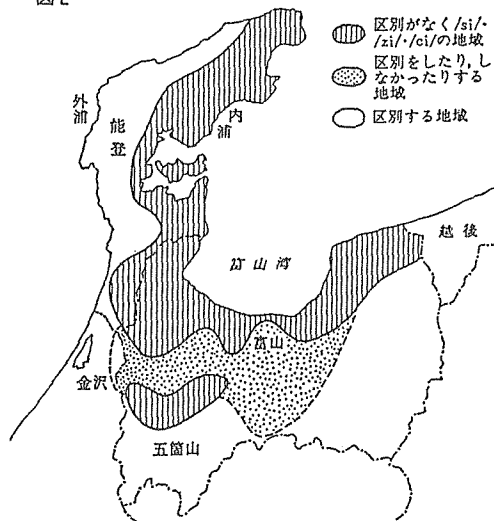
のような言い方が普通になされている。これも九州や東北の方言につながる用法である。

5. 音韻事項に関しても、古今東西のさまざまな事象が混じり合って存在しているのが実態である。

まず、東北方言との類似性について。イとエの混同が各地に認められる。特に平野部では両者がその中間音（狭いe）で発音されてほとんど区別されない。そして、主として沿岸部には中舌母音の〔i〕が分布し、シ・ジ・チとス・ズ・ツとの区別がない。富山市にもその傾向が若干認められる。ただし、五箇山などの山間部には中舌母音が存在してはいない（図2）。川本（1981）によると、/si/・/zi/・/ci/の実際の音価は青森・秋田、そして出雲などでの音価と一致するという。筆者はここに日本海文化（言語）のかつての連帯を見る思いがするのである。さらに、子音の有声化がある。語中のカ行子音に限りて有声化が見られる。呉西に目立つが五箇山には見られない。有声化は広母音を伴うカ・ケ・コに起こり、狭母音を伴うキ・

クには起こらない。

図2 北陸におけるシ・ジ・チとス・ズ・ツの区別



有声化とはまったく逆の現象であるが、イ段音・ウ段音に関して、母音の無声化と脱落が著しい。たとえば、キ・ク、シ・ス、チ・ツ、ピ・プなどが語末にくるとき、母音が脱落してそれぞれ [k] [s] [t] [b] と閉音節の形で発音される。

[warik] <割り木>, [kintʃak] <巾着>

[as] <足>, [karas] <鳥>

[enot] <命>, [nat] <夏>

[heb] <蛇>, [kab] <株>

また、語末にくるミ・ム・ニ・ヌ・ギ・グがともに撥音化することもこれに関連がある。たとえば、「紙」「蟹」「鍵」は、そのいずれもが [kan] となるわけである。これらの現象は平野部の一帯に認められるものであるが、山間部には存在しない。ちなみに、これらは列島西南部の

鹿兒島方言などと類似する現象である。

撥音・促音・長音などの部分が、標準語の音声に比べて短く詰まって聞こえる。しかし、その長さは東北北部の場合のような短さではない。これらの音は独立してアクセントの山を担うことがないので、いわゆるシラビーム的方言と言えるであろう。なお、一音節語は長音化するのが普通である。

北陸方言の特徴とされる、文節末における卓立下降型の独特のイントネーションは、間投助詞の機能を果たして、平野部で広く一般的に行われているが、五箇山ではこのイントネーションは本来存在しなかった新しいものである。

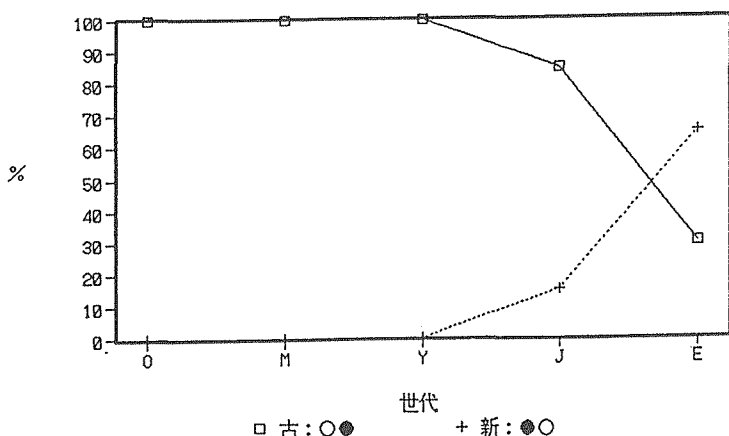
6. 富山県の方言もまた各地の多くの方言と同様、マスメディアによる東京語のシャワーによって、近年、動揺が激しくなっている。ここではことばの変化過程においてもっとも保守的と考えられているジャンルであるアクセント面を取り上げ、その変容の一端を見ることにしたい。

1989年、富山市でアクセントの世代的变化に関する総合調査をおこなった。その調査結果は、徳川・真田・新田編（1991）において報告した。図3～7は、そのデータの一部をグラフの形で整理したものである。（○は老年層を、Mは中年層を、Yは青年層を、Jは中学生を、Eは小学生を、それぞれ示す。）

図3は、「熊」という語のアクセント形の動態である。国語辞典類の記述では、かつてクマは○●とマの高い形が標準の形として示されていた。しかしながら、お膝元の東京で、1950年代あたり以降生まれの人々の間から●○とクの高い形が多く聞かれるようになった。そして今日テレビでは●○が普通に流されているのである。このような状況において、たとえば長野市などでは子供たちが、○●は山にいるクマで、●○はぬいぐるみのクマのことだと区別して理解しているケースも存在するようである。

ところで、富山市の本来のアクセント形も○●である。富山市では広母音のa・e・oで終わる2拍名詞は頭高型になりえないのである。この点

図3 富山市での「熊」のアクセントの推移



は真田（1990）でも詳述したが、富山はアクセントのシステムにおいて、クマについては●○の形を受け入れない音的フィルターをもっているはずなのである。しかし、図3によれば、確かに青年層までは○●しか現れていないが、中学生では15%くらいの比率で●○が現れており、小学生になると●○の方が多くなって過半数を越えるにいたっている。ここに本来のアクセントのシステムを崩す新しい動きの存在をはっきりと認めることができるのである。

図4以下は固有名詞におけるアクセントの変化を示したものである。

まず、図4は「金沢」という地名のアクセント形の動態である。老年層ではカナザワをすべての人が○●●○と発音しているが、中年層になると○●○○の形が現れてきて、青年層では○●○○が逆に100%になっている。○●○○は本場の金沢でのアクセント形でもあるが、このような激変の直接の引き金はやはりテレビであろう。

図5は、地名「名古屋」のアクセント形の動態である。老年層、中年層ではナゴヤは○●○と発音されることが多いが、青年層になると●○○の形が現れ、小・中学生では●○○が圧倒的になっている。しかし、実はこ

図4 「金沢」のアクセント

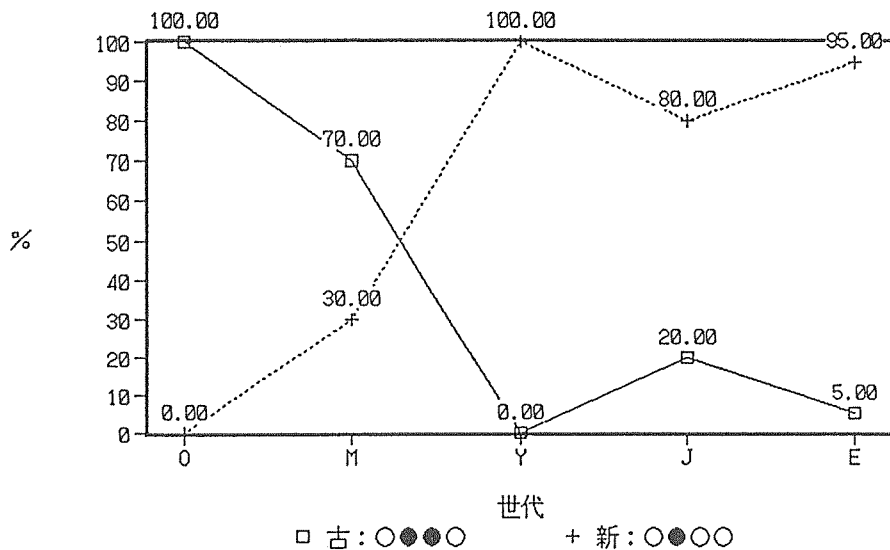


図5 「名古屋」のアクセント

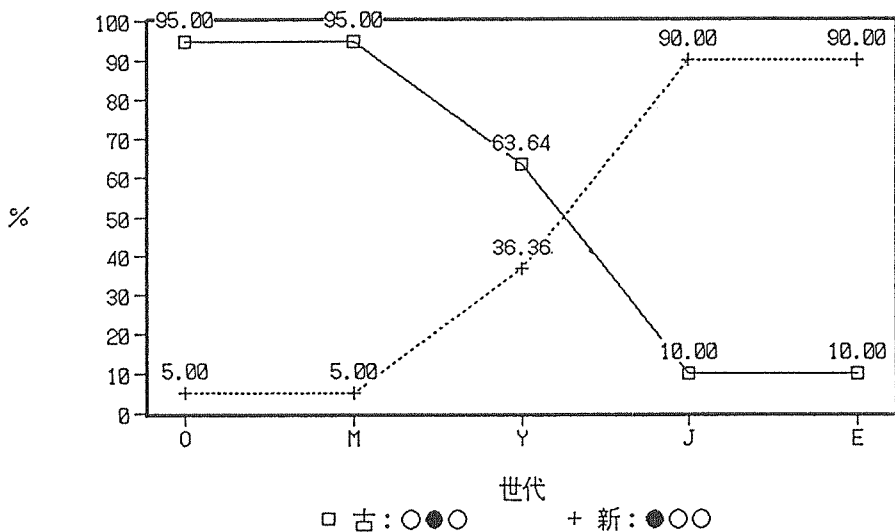


図6 「佐稜」のアクセント

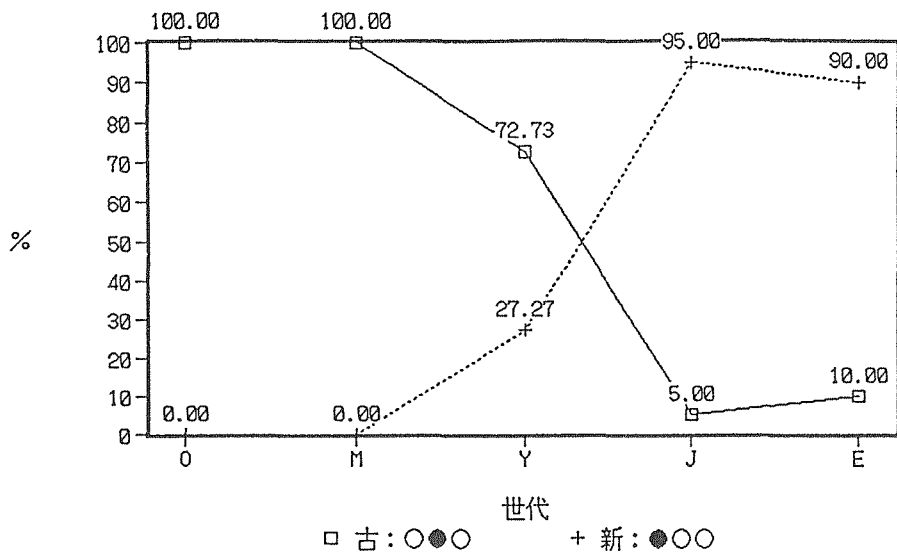
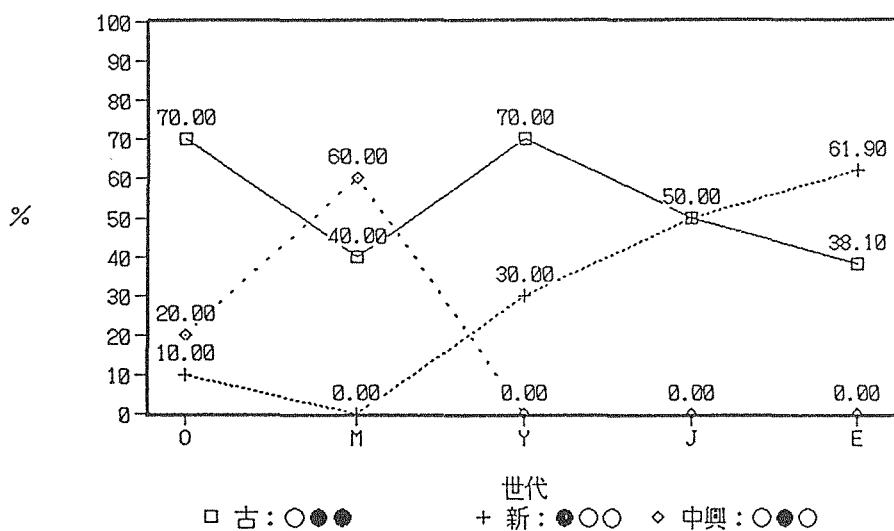


図7 「富山」のアクセント



の両形ともに本場の名古屋でのアクセントではないのである。名古屋の人は○○●と語末の高い形で発音するのが普通であった。したがって、ナギヤを●○○という人は本来の名古屋の人ではないとも言えるのである。ただし、筆者の観察によれば、名古屋でも最近は●○○と発音する人が増えてきているようである。これもテレビでは東京式のアクセント形●○○が流されていることによる結果であろう。

図6は、人名「佐藤」のアクセント形の動態である。老年層、中年層ではサトウは○●○と発音されているが、青年層になると●○○の形が現れ、小・中学生では●○○が圧倒的になっている。これもまたテレビでは東京式のアクセント形●○○が流されていることによる結果であろう。人名、地名など、固有名詞の場合にテレビの影響は特に強いと言える。

最後に、図7は当地「富山」という地名のアクセント形の動態である。トヤマのアクセント形は○●●と平板に発音されるのが本来であるが、テレビからは東京式の●○○が流されている。中学生では○●●と●○○とが拮抗しているが、小学生では●○○が過半数を越えるにいたっている。注目されるのは中年層で○●○という形が急増していることである。この○●○という形は、真田（1993）でも指摘したような、標準語形の●○○を方言に対応変換する過程で出現した新形と認められる。なお、トヤマのアクセント形の変化はほかの地名の場合と比べて保守的である。これはトヤマがこの地の生活の場でも不断に使われることばであるからであろう。テレビの影響はここで若干ながらくいとめられているわけである。

付記 小稿は、1992年11月13日、富山県学校図書館研究大会の全体会での講演において「富山県のことばについて」と題して話したことをまとめなおしたものである。

参考文献

- 川本栄一郎（1981）「日本海側におけるズーズー弁の地域分布」『言語生活』360
- 真田信治（1990）『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
- 真田信治（1993）「現代日本語論への新しい視点 方言」『国文学』38-12
- 下野雅昭（1983）「富山県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会
- 徳川宗賢・真田信治・新田哲夫編（1991）『富山市におけるアクセントの動態（資料）』科学研究費重点領域研究（「日本語音声」）研究成果刊行書

（本学文学部教授）